TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

豊田有恒
暗号名（コードネーム）は虎

Aritune Toyota ©1979
カバー絵／山野辺　進　デザイン／矢島高光
本文・挿画　山野辺　進
落丁・乱丁はおとりかえいたします
〈編集担当　前島不二雄〉

書下し長篇アクションSF

暗号名(コードネーム)は虎

豊田有恒

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

1 深夜のカーチェイス……7
2 ノイエ・ナチス……19
3 麻布の大邸宅……31
4 インゲの失踪……49
5 事　故……56
6 ダウガワスの鷹……62
7 熊野の猪垣……74
8 ミンカの訪問……78
9 公安捜査官……88
10 浜名湖サービスエリア……92
11 伊良湖フェリー……98

12 四輪駆動車……108
13 聖の里……125
14 聖の系譜……135
15 超能力の対決……150
16 猪垣の攻防……154
17 米ソ超能力戦……167
18 虎の行方……173
19 KGB超能力者……179
20 伏虎洞……189
21 対ESP部隊……205
あとがき……215

1　深夜のカーチェイス

夜の闇のなかを、ヘッドライトの光芒が、地を這う蛇のように、尾をひいていった。ホテルの入口をでたところで、ギヤをシフトアップすると、おれは、アクセルを踏みつけた。急加速のショックで、背骨がシートに押しつけられると、とたんに睡気が吹っとんだ。おれのフェアレディZは、硬めのサスペンションをつけているので、かなり乱暴にステアリング・ホイールをさばいても、タイヤは鳴らなかった。

ホテルのまえの信号が青になると同時に、おれは、アクセルを踏みつけて、まっさきにとびだした。なぜなら、今夜は、虫の居所がわるかったからである。

おれの名は、宇賀神宇一郎。週刊誌のトップ屋をやっている。仲間たちは、おれのイニシャルをとって、U・Uと呼んでいる。

この夜、おれは、打合せのため、遅くなった。次の記事のリライトの方針をめぐって、担当の編集者といっしょに、ホテルのバーで呑みながら話していたからである。相手が、あまり訳のわからないことをいうので、おれは、あやうく癇癪を爆発させるところだった。おれは、べつだん、その出版社の社員ではない。一匹狼のフリーランサーである。それにもかかわらず、その社のなかの年功序列をもちだして、おれの方針を無視してかかってきたのである。

週刊誌の記事というのは、一般読者が考えているように、社内の記者だけで作られるわけではない。記者が取材してきた材料を、おもしろおかしくまとめあげる才能が必要であり、その作業は社外のライターに外注されるのが、ふつうである。ときには、おれのようなトップ屋が、直接に取材にでむくこともある。そういうときは、その週刊誌の特派記者という名刺を用意するが、その記事一回しか通用しない資格である。

したがって、おれの仕事は、雇われ忍者のようなもので、身分も収入も不安定だが、自分では、それに満

足している。おれは、もともと枠にはめられるのが嫌いな性分で、しかも人一倍、好奇心のつよい性格だから、この稼業に向いているにちがいない。記事が誌面にあらわれても、おれの名は金輪際でることがない。おなじ物書きでも、そこが、小説家や脚本家とは違うところである。

おれは、行手の信号が青であるのを見定め、大きく右へふくらんで、ぎりぎりのところで、インにまわりこみ、あまり減速せずに左折した。

「助けて！」

女の声が、おれの脳裡にとびこんできたのは、そのときだった。おれは、おもわず、はっとした。

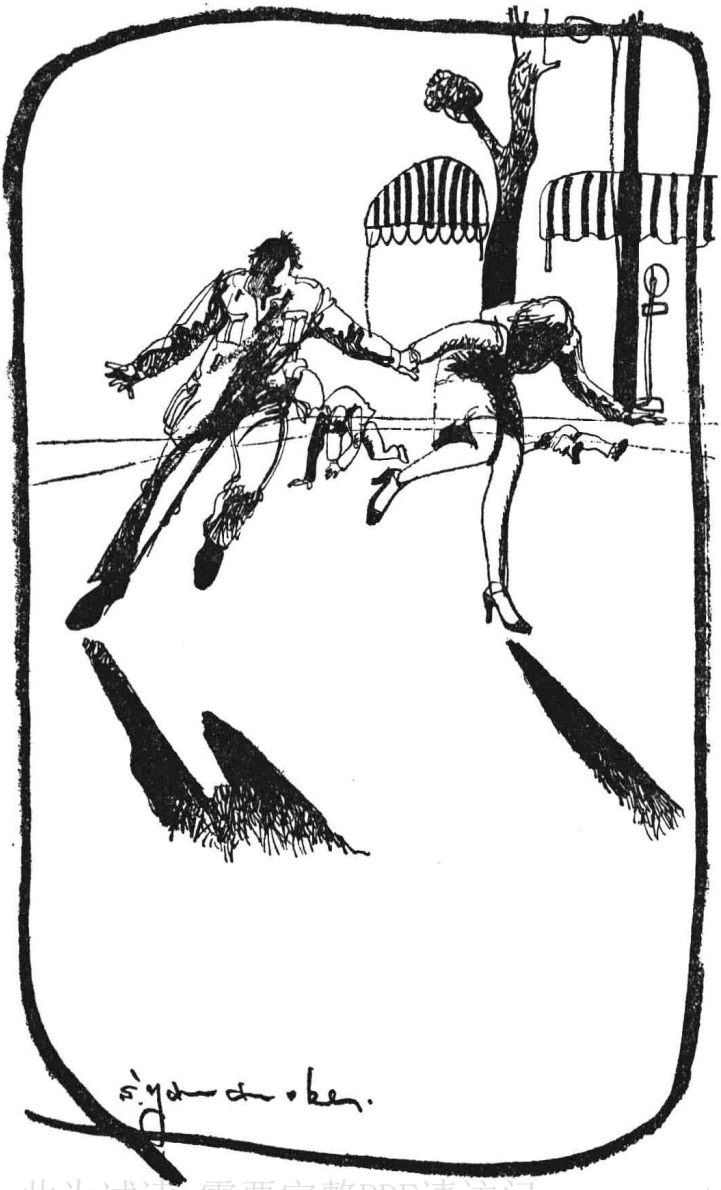
車のなかには、おれ一人しかいない。また、もし、外から呼びかけられたとしても、エンジンの咆哮にかき消されて、車内へは届くはずがない。

聞こえたというより、だしぬけに、おれの心のなかに、滲みこんできたような感じだった。しかも、その言葉は、どこかの外国語のように思えたが、ちゃんと意味は通じた。

おれは、アクセルをゆるめ、減速してあたりを見まわした。しかし、この夜中の一時という時間に、あたりを歩いている人影も、見あたらなかった。

おれは、幻聴だとは、思わなかった。なぜなら、ずっとまえにも、一度、そんなことがあったからである。学生時代、駅のホームで、一人の男の声を聞いた。きょろきょろ見まわしてみたが、誰一人、そんな大声を発したようには見えなかった。その男の声は、一人の女の名を呼んだ。おれが、不思議に思っていると、ホームに入ってきた電車が、異常な止まりかたをした。三十メートルばかり先に、人だかりがしているので、駆けつけてみると、男の跳込自殺があったという。あとで週刊誌で知ったのだが、そのとき、おれが耳にした女の名は、自殺した男の妻君のものだった。いったい、ホームの雑踏のなかで、三十メートルも向こうにいた男の声が、聞こえるものだろうか？　そのことは、ながいあいだ、おれの心にひっかかっていた。

そして、今おれが聞いた――というより、感じた声は、あのときの男の声と、まったく同じような感じだ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

った。男の声、女の声ということが判るだけで、声の質――太い声、細い声といったような区別が、まったく感じとれなかった。むしろ、声ですらもなく、ある意味をもったセンテンスが、おれの心に直接ひびいてきたような気がした。

おれは、短く可愛らしいシフトノブを握り、セカンドにシフトダウンしてから、猛然とアクセルを踏みこんだ。なんとなく、あの声のした方角が判るような気がしたからである。

呼んでいる。たしかに、誰かが、おれを呼んでいる。しかも、それほど遠いところではない。このまま進めば、秒単位で、そこへ着ける。

おれは、青信号になったばかりの行手の交叉点に、まったく減速せずに突っこみ、神宮外苑の一方通行路に入りこんだ。

行手の個人タクシーを追いぬき、車線を変更したとき、はるか向こうの歩道に、もつれあう三つの人影を見つけた。おれの勘は、ここが、その場所であると教えていた。

一方通行路なのを幸いに、おれは車を右へ寄せていき、人影のそばで、ブレーキがロックするような勢いで、急停止をかけた。

ドアをあけて、歩道のうえにおどりでると人影の正体が判った。背の高い二人の男が、一人の女を連れさろうとしているところだった。二、三十メートルばかり向こうに、黒い大型の車がとめてあり、そこまで引きずっていこうとしているように見えた。

男たちに腕をとられた女は、しきりにもがいているが、すらりとした両脚は、空をかくばかりだった。

面倒にまきこまれるのではないかという恐れが、一瞬おれの心をかすめた。しかし、すぐ、持前の好奇心が、おれの心をぬりつぶした。

「待ってください。なにか、あったんですか」

おれは、三人の背後から話しかけた。かれらも、急ブレーキで止まったおれの車に気づいているはずである。それにもかかわらず、かれらは振りむきもしなかった。一刻もはやく女を車に運びこんでしまおうというつもりにちがいない。

長身の男の一人が振りむいた。こちらも、車から駆けおりたばかりで、よく観察していなかったが、金髪の外国人だった。
「きみの知ったことじゃない。この女、酔ってるんだ」
その男は、訛りのある英語で答えた。母音をはっきり発音してくれるので、きわめて判りやすい英語だった。
そのとき、女がもがきながら振りむいた。その女の髪は、月光に照らされて白く光っていた。だが、決して老婆ではない。若く整った美しい顔だちをしていた。
「ちがう！　助けて！」
女がしぼりだすように叫んだ。おれは、その瞬間に、この女こそ、先ほど、おれにむかって呼びかけた相手だと知った。
「彼女、行きたくないんだ」
おれは、三人のまえにまわりこんで、ゆっくり言った。
これまでにも、持前の好奇心のため、厄介ごとにまきこまれたことが、数知れずある。因果な性分だと思うのだが、自分でもどうにもならない。そして、今また、おれは、なにかの面倒に巻きこまれかけていた。
「きみとはかかわりないことだ」
もう一人の男が叫んだ。この男も、六フィート四インチはたっぷりありそうな上背をして、牡牛のような肩をしていた。
「そのお嬢さんから、手をはなすんだ」
おれは、やむなく叫んでしまった。これまでは、日本人の面倒にかかわりあうだけで済んでいたのだが、とうとう外国人の面倒にまで巻きこまれてしまった。われながら、つくづく因果な性分だと、なかばあきれながら、二人の外国人の反応を待った。
「そこをどけ、くりかえしていうが、きみとは、かかわりのないことだ」
はじめの外国人が、恫喝にでた。
「あいにく、おれは、他人のことに、かかわりをもつのが、趣味なんでね」
おれは、言いかえした。言いかえしながら、おれは、考えていた。さきほど、女は、助けてと言った。ドイ

ツ語である。中退した医学部で第二外国語としてやっただけだから、たいして身についているわけではないが、文科系の出身者よりすこしばかりましなくらいには、覚えているものらしい。

してみると、この三人は、ドイツ人ということになる。長身で金髪という特徴も、典型的なアーリア系人種にみえる。

おれのほうが本気だと見てとると、ようやく二人のドイツ人は、女から手をはなし、左右から、おれのほうに一歩ふみだした。

女は、優雅な身ぶりで、おれのうしろに逃げこんできた。

おれは、二人を見くらべながら、二、三歩さがった。

「日本人のきみには判らん事情がある。安手のヒロイズムに酔っていると、手痛い目にあうことになるぞ」

ドイツ人は、言った。あくまで恫喝にでて、おれを引退らせようというつもりらしい。

「あんたは、おれがいちばん嫌っている類の言葉を、おれにむかって口にした。そう言われては、余計ひっこむわけにはいかなくなる」

おれは、言いかえした。そのとたんに、左右から、二人が、おどりかかってきた。おれは、いったん身をひいてから、攻勢にでた。一人の向こう脛を、靴の先で力いっぱい蹴りあげ、そいつがひるんだすきに、もう一人におどりかかった。喧嘩なれしているつもりでも、そいつとの体格の差を計算にいれていなかったのがまずかった。強烈なショルダー・アタックをくらって、おれは、あおむけにひっくりかえった。かろうじて、起きあがると、強烈なパンチが襲ってきて、ふたたび、おれは、あおむけに、ひっくりかえった。その男が、おれのうえに、おおいかぶさってくるのを、反射的に足をあげて受けとめ、鼻先をかすめて、反対側に投げとばした。学生時代、すこしばかり習っていた柔道の巴投げが、偶然のタイミングで、うまく決まったのである。その男は、したたか腰を打ちつけたらしく、しばらく起きあがれない。

おれは、すばやく跳ねおきて、女の手をとって、走りだした。左側のドアを引きあけ女を押しこみ、右側

のドアにとびついたとき、はじめの男が、びっこをひきながら追ってきた。巴投げをくらった男は、ようやく起きあがるところだった。

おれは、びっこの鼻先でドアをしめ、手早くギアをシフトして、アクセルを踏みこみ、クラッチをミートさせた。オーバートルクのため、スリップしながら、おれの車はスタートした。右側の窓に、よろめきながら走っていく、二人の男たちの姿が、置きさられていった。前方にとめてある黒いセダンにもどり、おれを追いかけようというつもりなのだろう。

おれは、猛然とスピードをあげて、外苑の一方通行路を走りぬけて、左手に出はずれた。まっしぐらに加速していくと、信濃町の信号にひっかかった。おれは、前の二台のタクシーと距離をあけて止まり、ほっと胸をなでおろした。

「大丈夫(アイ・ニー・オールライト)？」

おれは、女にむかって訊いた。このときになって、ようやく、女の様子を、観察する余裕ができた。女は、二十七、八歳だろうか。いかにもアーリア人種らしい、彫りのふかい顔をしていた。さきほど白髪のように見えたのは、日本人には馴染のない、プラチナ・ブロンドの髪をしていたからである。

「大丈夫(アイ・ニー・オールライト)よ。それより、あなたのほうが」

女は、アルトの声で言った。おれは、顔をぬぐって、手にべっとりとついているものを感じた。さっき殴られたとき鼻血をだしていたのである。われながら、すごい御面相になっているのだろう。女がハンカチをさしだしたので、おれは、受けとって顔をぬぐった。

おれは、ふとフェンダーミラーに目をやって、愕然とした。はるか後方から、右側の車線を突っぱしって、ヘッドライトが近づいてくるのである。

おれは、咄嗟に、ステアリングを右に切った。前のタクシーと距離をおいて止まったのがよかった。六J×14のアルミ・ホイールが鉛のように重く感じられたが、おれは信号待ちの車線を抜けだして、反対車線に入りこんだ。うしろのヘッドライトが、迫突するような勢いで近づいてくるので、おれは、踏みぬけるくらいアクセルを踏みこんだ。回転計(タコメーター)が六千RPMにはね

あがり、燃料噴射つき百三十PSのOHCエンジンが唸った。おれは、まえに止まっている三台のタクシーをゴボウ抜きにして、交叉点にとびこもうとした。そのとき信号が変ったので、おれは、もとの車線に入って、そのまま一気に加速した。うしろからきた黒いセダンも、無謀操縦のまま突っこんできた。反対車線のタクシーが、いったん発進しかけて、ブレーキ・ライニングの悲鳴をあげて急停車した。おれは、車列の先頭にたって、回転計がぶちきれるくらい加速していった。そのあとから、あの黒いセダンが、ぴったりとつけてくる。アメリカ車らしく、大型車ながら、トルコンのハンディをものともしないくらいの、七千CC級のマンモス・エンジンを積んでいるのだろう。ぴたりとうしろについてくるので、いっこうに引きはなせない。

明治通りとの交叉点にさしかかったとき、またしても赤信号にひっかかったので、おれは、違反を承知のうえで、右側の車線に入りこみ、車列の先頭をかすめて左へ曲がろうとした。うしろのセダンも、おなじように追ってくる。しかし、あいにくなことに、今度は都合よく信号が変ってくれない。おれは、信号を無視して、強引に左折していった。割りこまれた車がガクンとなるのが、ルームミラーに写しだされたが、間一髪で追突されずに済んだ。割りこまれた車は、きゅうに加速してきた。そのため、黒いセダンが左折してきたのは、その車のあとになった。

おれは、うしろの車が、左側から前へでようとしているのを知った。こちらの車線は、タクシーで前がつかえているからである。二台ならんでみると、その千六百CCクーペには、フルシートで若い男たちが乗っていた。やたらとステッカーをはりつけた、暴走族予備車とでもいった連中らしい。

おれの割込みは、無謀なように見えるが、S（スタート）四百メートルまで十七秒台という加速力を計算に入れているから、それほど危険はなかったはずである。連中が、あれほどの急ブレーキを踏む必要は、まったくなかったわけである。ところが、連中は、割込まれたことを根にもって、カッカとなっているらしい。

おれは、対向車がないのを見定め、反対車線に入って、いっきに加速した。おれの車を追って、連中のクーペが右へ寄ってきたため、黒い大型セダンは、右へはじきだされた形になった。それにも気づかず、クーペは、おれの車を追って右へでてきた。そのため、右側の反対車線に、クーペと大型セダンが並ぶという二重追越しのような状態になった。

おれは、右側の車線から、次の信号でだしぬけに右折した。ところが、追ってきたクーペとセダンが、信号のところに追いついて来たときには、右側の車線には、対向車が来てしまった。

おれは、一方通行路のなかで、背後の信号のあたりから、すさまじい大音響が湧きおこるのを聞いていた。それは、金属とガラスの激突する音だった。

おれは、一方通行路をぬけて、原宿駅の坂下口の信号にでて、おとなしく青信号になるのを待った。もはや、急ぐ必要もないからである。

「やつらは、おれたちを、追ってこられないんだ」

おれは、しばらく構文を考えてから、ドイツ語で言った。

「あなた、ドイツ語を話せるのね」

「ほんのすこしだけだ。大学時代にならったんだ」

おれは答えた。

「どこへ行くの？」

「おれのアパートだ」

はたして、アパルトメントなどという単語が、ドイツ語にあるかどうか疑問だったが、ともかく意味は通じた。

「あたし、インゲボルグ・シュニッツラーって言うの。ね、インゲって呼んで」

「おれは、宇賀神宇一郎だ」

「ウガジン・ヴィッチロー」

インゲは、かなり正確に、おれの名を発音した。ふつう、アメリカ人だと、日本人の名前を正確に発音しにくいものだが、同じ印欧語族の人種のうちでも、ドイツ人は、かなり流暢に発音できる。ドイツ語では、日本語と同じように、たいていの場合、子音のあとに母音がつくことが多いからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton